

お茶の水女子大学 グローバル協力センター ニュースレター

センター長メッセージ

目次

センター長メッセージ	1
「共に生きる」勉強会	3
国際ワークショップ 「共に生きる」	4
東ティモール調査	4
ウガンダ調査	6
INEE 国際会議	7
公開講演会	8
公開講義	9
アフガニスタン学術 フォーラム	9
子どもと開発研究会	10
JICA 青年研修の実施	11
国際学生フォーラムに ついて	12
ミルズカレッジ研修に ついて	13
センター行事	14

サンフランシスコの隣町オークランドにあるミルズカレッジ (Mills College) で3日間を過ごしています。3月の初めのカリフォルニア北部は夜にはかなり冷え込みますが、昼は暑くて半袖の学生も見かけます。さわやかな気候ですが、そこはサンフランシスコ、夜は雨と霧で星はあまり見えません。



タイの少数民族の学校にて

ミルズカレッジでは「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」プロジェクトの一環として、お茶の水女子大学と4つの女子大学の学生6名と対話プログラムを行っています。講義に参加したり学生とディスカッションしたりと大変充実した内容がびっしり組まれたスケジュールに少し疲れ気味ですが、参加学生ともども大きな刺激を受けています。これを60の手習い、あるいは年寄りの冷や水というのかもしれません。

グローバル協力センターとしてはこれが今年度最後のイベントですが、おかげさまで、沢山の思い出に残る活動ができたこと御礼申し上げる次第です。お茶の水女子大学の国際的な活動はこれまでもいくつもありますが、昨年来のセンターの活動は、はじめての試みも多く、試行錯誤しながら行ってきたというのが実情です。どのような活動を行ったかは、このニュースレターに触れられることと思いますが、いくつか思い出に残る活動について、エピソードを少し紹介することにします。

6月に行った池上彰さんの講演会は650人という思いもかけない方々に参加いただきました。はじめは小さい教室での対話を中心にした会を考えていました。ところが、多くの人から参加希望が寄せられ、急遽大きな会場（徽音堂）に変更しました。当日池上さんからは、「教室で学生さんとお話するということだったよね」と言われました。「池上さんの人気がこれほどとは」と褒め殺して逃げた記憶があります。

この催しの後、いくつかの団体や自治体から、池上さんとどのようにコンタクトしたのか、講演料はいくらかとの問い合わせがありました。「企業秘密です」とご返事いたしましたが、実は外部に言えないほど低い講演料でしたので、答えることができなかったということもあります。去年は池上彰さんがブレイクした年で、この講演のあとも迎えの車でテレビ局に向かわれたくらいでした。そんな中でも講演の後、本学学生とゆっくりお話ししたり、サインをいただく時間も取ってくださり、また後に講演記録をブックレットにする際にも校正を2日くらいの短時間でやっていただくなど、大変お世話になりました。池上さんはほんとによい人です、というのがスタッフ一同の感慨です。

12月の国際ワークショップは、世界の5つの大学と国内の6つの大学の教員と学生が集まり、東京と奈良が会場という手間のかかるイベントでした。その準備のため国内の女子大生の合宿や勉強会、海外の大学訪問と打ち合わせを行いました。スタッフ一同で飛び回っている感じで、目の回る忙しさでした。

開催してみると講師の方や参加した教員のスピーチ、特に学生のプレゼンテーションは大変素晴らしく大きな刺激を受けました。奈良女子大学での学生による最後の成果の発表は大変盛り上がりました。学生は活躍の場を用意することで、大きく成長するのだなと思われました。しかし、国際ワークショップは、準備がとても大変で、センターのスタッフの方には大変ご苦労をかけました、改めて感謝する次第です。

今年に入ってから1月にJICA アフガニスタン女性教員研修、2月にヴァッサー大学との学生フォーラム、ミリアム・ウェレ博士への名誉博士号授与と講演会、3月にミルズカレッジへの学生派遣と行事が続きました。

アフガニスタン女性教員研修中に行った国際シンポジウムでは、帰国した国費留学生4人を招聘いたしましたが、帰国留学生にも指導された先生方にも大変喜んでいただきました。ただ、アフガンの方の日本のVISA取得や航空券の手配はなかなか骨の折れる仕事で、実現するか分からない日が続きました。実際に来日した元留学生の顔を見て初めてほっとしました。

ウェレ博士来日に関わるイベントはお茶の水女子大学での講演と合わせて、JICA 緒方貞子理事長、外務政務官との懇談、国際ボランティア学会での講演やJICAでの講演会も組まれ、どこでも大歓迎されました。緒方さんとの懇談は30分の予定でしたが、異例の50分近くになってしまいました。お茶の水女子大学の名誉博士第1号の緒方さんと今回のミリアム博士への授与と言うことでお話が盛り上がったと聞いています。

いよいよ今年度が終わります。私もこの3月で定年退職いたします。2年間のセンター長勤務ではありましたが、思い出がたくさんできました。なによりセンターの少ないスタッフで、これもあれもという私の提案を、実現してくださったことを心より感謝しています。また、内海ゼミの学生をはじめ沢山の学生諸君がいろいろな機会に駆けつけてくれたこともありがたかったです。

羽入学長、河村副学長、石井評議員の執行部の先生方や事務の方々に多大なご心配とご迷惑をおかけしたことを感謝を持ってお詫びいたします。

これからは少し離れた形での関わりになりますが、出てきた芽を育てていただければと願っています。本当にありがとうございました。

2011年3月4日

内海成治（ミルズカレッジのドミトリーで）

「共に生きる」勉強会 (@日本女子大学)

2010 年 10 月、3 連休の前半 2 日間に、平和構築の勉強会が日本女子大学で行われ、関東・関西の 7 女子大学（お茶の水女子大学・奈良女子大学・日本女子大学・津田塾大学・甲南女子大学・神戸女学院大学・同志社女子大学）が一堂に会しました。

1 日目には、内海先生・澤村先生（大阪大学）の調査研究に関する講義、お茶の水女子大学 4 年生による卒業研究フィールドワークの報告、またゲスト講師として PWJ（ピースウィンズ・ジャパン）山本理夏さんの講演が行われました。後半は 3 グループに分かれ、平和構築の実現に向けて私たちが出来ることを考えました。夜中までの話し合いは合宿形式のセッションの醍醐味でもあり、先生方にも遅くまでお付き合いいただいて内容の濃い意見交換を行うことができました。2 日目のグループ別プレゼンテーションでは、「信じること」「笑顔」といったキーワードに加え、女子大学間ネットワークの強化が課題として挙がりました。

参加学生には 1 年生も多く、エネルギッシュなディスカッションに多くの刺激を受けた 2 日間となりました。特に関西の大学生とは今までなかなか知りあう機会がありませんでしたが、このような場を通じて大学や専攻、学年を越えたつながりが築けたことは非常に有意義であったと思います。合宿での出会いや刺激をいかに持続し、かたちあるものにしていくかが今後の私たちの課題となりました。

（グローバル文化学環 3 年 新井杏子）



全員で記念撮影



内海先生の説明

国際ワークショップ「共に生きる」

2010年12月6日～9日、お茶の水女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、奈良女子大学、同志社女子大学、日本女子大学、梨花女子大学校（韓国）、ミルズカレッジ（アメリカ）、ヴァッサー大学（アメリカ）、フィリピン女子大学（フィリピン）、ケニヤッタ大学（ケニア）から教員、学生が参加して国際ワークショップ「共に生きる」が開催されました。6日はオリエンテーションを行い、午後からは秋葉原や原宿などを訪れ、グループワークを行いました。7日はお茶大にて、プリンストン大学のDavid Leheny教授、国連ボランティア計画（UNV）の長瀬慎治氏、及び国際協力機構（JICA）の阿部俊哉氏による講義が行われ、私たち学生も取り組みについて報告しました。8日は新幹線にて奈良まで移動し、奈良女子大学周辺にある奈良公園や東大寺を見て回りました。最終日は、奈良女子大学にてレクチャーを受けた後、「共に生きるーグローバル社会において私たちが出来ることー」を研究、実践についてグループワークをし、それぞれで意見をまとめました。

国際ワークショップということでレクチャー、グループワーク、観光、ホテルの部屋でもほとんどが英語でのコミュニケーションでした。しかし、国際機関、NGO、JICAなどの取り組みや国内、海外の学生の取り組みについて知ることができ有意義な4日間となりました。

（グローバル文化学環3年 西郷智香子）



記念撮影（お茶の水女子大学）



記念撮影（奈良女子大学）

東ティモール調査

調査期間： 2010年7月14日（水）～26日（月）
調査地： 首都ディリ県、エルメラ県レテフォホ郡（コーヒー農家、小学校）、ディリ県ヘラ村（民家）
調査者： 内海成治教授、阿部健一教授（総合地球環境学研究所）、桑名恵講師
齋藤智美、植月綾子、新井杏子、西郷智香子（グローバル文化学環）

◇コーヒー農家視察

東ティモールの主産業であるコーヒーの農家を視察し、コーヒー豆の収穫、選別、加工までの過程を体験させて頂きました。東ティモールの主要産業は農業、とりわけ高地を生かしたコーヒー産業が中心であるため、農家の所得向上のためには、コーヒーを適正な価格で取引できるようになる体制作りが必要です。農家への加工・管理指導やフェアトレードなどを行っている日本の NGO オフィスにも訪問し、話を伺いました。



コーヒー豆の乾燥（レテフォホ村）

◇オロパナ小学校訪問

山間部にある小学校を訪問し、学校の進級構造を把握するため、全校生徒に対するインタビュー調査を行いました。長期にわたる諸外国による統治や、独立前後の騒乱の影響により、学校教育にはいくつもの課題点があるとされています。その実情を知るために、実際の現場で生の声を聞いてきました。3日間通して子どもたちと直に向き合い、135名分の個票を回収しました。



オロパナ小学校

◇民家、学校のトイレ視察

日本企業の CSR の実態に迫るため、2007 年以降ユニセフによって建設されたというトイレの視察を行いました。特に民家においては、現地のニーズに合わず十分に機能していないトイレを多く目にしました。保健教育を行う日本 NGO のオフィスにも訪問し、話を伺いました。物質的な支援を行う前に、現地のニーズや生活の様子を把握する重要性を改めて認識するものとなりました。



壊れてしまったトイレ

◇ユニセフオフィス訪問

各調査を行う前、首都ディリにあるユニセフオフィスへ訪問し、東ティモールの歴史的背景や、学校教育、保健衛生への取り組みについて話を伺いました。日本人職員の方数人にもお会いし、活動の紹介などをして頂きました。同国内では、国連主導での統治が独立後も続いてきたため、いまだに国連による支援が多く分野で行われています。

（グローバル文化学環 4 年 植月綾子）

ウガンダ調査

2010年8月15日～25日の10日間、内海先生、グローバル文化学環4年の豊永、小島の3人で北部ウガンダを訪れました。ウガンダまでは日本から飛行機で18時間、目的地である北部のグルという街までは、更に車で4～5時間かかります。

北部ウガンダでは、神の抵抗軍（LRA）との内戦が20年以上にわたり続き、2008年に停戦合意がなされたばかりです。この内戦の影響で、3万人以上の子ども達が誘拐され兵士となり、200万人以上の住民が強制移住させられ国内避難民となりました。豊永は、京都に本部を置くNGO テラ・ルネッサンスが行う元子ども兵の職業訓練を、小島は、JICA が実施している国内避難民の帰還支援をそれぞれ調査しました。

調査でわかったことは、皆一様に教育に熱心であることです。テラ・ルネッサンスの職業訓練校でも、乳飲み子を抱えながら洋裁の勉強をしている姿が目立ちました。現地住民の方々も村に学校がない為に、子どもだけキャンプに残してきたり、コミュニティスクールを自ら建設するなど、教育に対して執着心を抱いている様子が窺えました。紛争後の社会において教育の重要性が増していることがわかります。しかし、教育への支援は不十分であり、人々のニーズと現状の支援のギャップを感じずにはいられませんでした。

また、最もショックだったのは、現地の住民の方ほぼ全員が、自分あるいは家族がLRAに誘拐されたり殺されたりした経験を持つことです。特に自分と同世代の方も多く、自分がいかに平和な世で暮らしてきたのかを実感し、衝撃でした。ウガンダ北部は血生臭い争いがあったとは思えないほどのどかな場所です。人々もこちらが手を振ると振り返してくれ、質問にも嫌な顔ひとつせず答えてくれます。「世界最悪の人道危機」と言われた紛争が起こった場所だとは今でも信じられません。

現地調査では、JICA ウガンダ事務所の方々、グルフィールドオフィスの方々、NGO テラ・ルネッサンスの方々には、大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

（グローバル文化学環4年 小島千尋）



避難民キャンプから帰還した一家と豊永（左）小島（右）



ニワトリをプレゼントされる内海先生

INEE 国際会議

2010年11月4日から7日まで、INEE（Inter-Agency Network for Education in Emergencies）の国際会議に参加するために、パリに行ってきました。

INEEとは、紛争、災害などの緊急時及び復興時において、すべての人々に安全で質の良い教育機会を確保するために、国連機関、NGO、政府、研究機関、学校などが参加する、グローバルに開かれたネットワークです。このINEEが定めている、緊急時の教育ミニмумスタンダードを、内海ゼミの学生たちで日本語に翻訳しました。

今回の会議は、この教育ミニмумスタンダードやINEEのガイドブックなどの刊行に際して、11月5日に、パリにあるユネスコ本部で開かれ、INEE ミニмумスタンダードの翻訳に関わった内海先生、中川真帆、小島千尋と私の4人で参加しました。会議では、主にINEEが発行しているガイドブックなどの資料を使いながら、参加者でいくつかのワークショップをしました。多様な国々、多様なバックグラウンドを持った人々が参加しており、自分の経験を踏まえて、みんなで話し合う様子が印象的でした。私は英語で行われる国際会議に参加するのは初めての体験でしたが、若い女性が多く参加し、活躍しているのを感じ、とても刺激になりました。

（グローバル文化学環4年 齋藤智美）



ユネスコ本部



ユネスコ第Ⅵ会議室



エッフェル塔をバックに左から齋藤・小島・中川

公開講演会「共に生きる—ミリアム・ウェレ博士に聞く」

2011年2月21日、本学において、ミリアム・ウェレ博士に名誉博士称号を授与し、記念講演会を開催しました。本学では、2002年にアフガニスタン復興支援として行なわれた女子教育支援をきっかけに、アジアやアフリカ地域をも視野に入れて、女性と子どもに関わる平和構築のための支援活動に取り組んでいます。今回の名誉博士称号は、ウェレ博士の業績、社会活動への貢献を讃え、本学の活動のいわば一つの理想の形として顕彰したものです。

ウェレ博士は、長年にわたりケニアを中心としたアフリカ地域における保健医療活動ならびに青少年活動に精力的に取り組まれ、それらの偉大な功績によって、2008年に日本政府によるアフリカでの医学分野の最高の賞である、野口英世アフリカ医学賞を受賞された方です。女性が教育を受けることが困難であった時代に高等教育を受け、アメリカ留学によって博士の学位を取得されました。ナイロビ大学医学部教授、医学部長としてケニアをはじめとするサブサハラアフリカの医学教育に大きな貢献をされました。特にウェレ博士が理事長を務める African Medical and Research Foundation は、遠隔地の病人への緊急搬送を行うフライングドクターシステムを実践しています。ウジマ財団の理事長としても、ナイロビのスラムであるキベラ地区を中心とした青少年活動の場を作り、青少年自身による麻薬依存に対する予防・更生活動を通じて、キベラ地区の麻薬使用率の減少に貢献しました。また、ケニアの HIV/AIDS に対する活動の責任者としての活動も高く評価されています。

授与式後は、本学グローバル協力センターが実施している「グローバル社会における平和構築のための

大学間ネットワークの創成」事業の一環として、記念講演会「共に生きる—ミリアム・ウェレ博士に聞く」が開催されました。ウェレ博士からは、紛争の多いアフリカの平和を実現するために、コミュニティや市民の連帯を通じた、日本をはじめとするグローバルなネットワークの構築が不可欠であることが講演されました。学生からは女性としての役割、コミュニティからの活動の重要性等に関する数々の質問がなされ、活発な議論が行われました。最後には、ウェレ博士とともに参加者が立ち上がって、手拍子をしながらケニアの歌を歌いながら締めくくられました。「共に生きる」社会の実現の第一歩として、アフリカと日本の間の温かい連帯を感じさせる講演会となりました。

(グローバル協力センター講師 桑名恵)



ミリアム・ウェレ博士と羽入学長

公開講義「共に生きる—国際協力、国際ボランティアを考えよう」

お茶の水女子大学では、世界の困難な地域の子どもや女性への支援の研究を通じて「共に生きる」ことを考える場を作るため、世界の様々な地域で実践・研究に携わってきた4名の方を講師に招き、「国際協力、国際ボランティア」を主題とした年間4回の公開講義を行いました。学生や院生をはじめ、地域の方々にも参加していただきました。

- 第1回（6月24日）
「国際協力とは何だろう—アフガニスタンから」
内海 成治（お茶の水女子大学教授）
- 第2回（7月29日）
「つながることにより豊かになる—
コーヒー・トレードと東ティモール」
阿部 健一（総合地球環境学研究所教授）
- 第3回（10月28日）
「私の歩いた東南アジア—島と海と森」
村井 吉敬（早稲田大学アジア研究機構教授）
- 第4回（11月25日）「国際緊急人道支援とは何だろう」
桑名 恵（お茶の水女子大学グローバル協力センター講師）



桑名 恵先生
（お茶の水女子大学）



村井吉敬先生
（早稲田大学）

アフガニスタン学術フォーラム

アフガニスタンへの理解を深めることにより、特に困難な状況における女性や子どもたちに、私たちがどのように関わっていけるかを考える場として、アフガニスタン学術フォーラムを全2回開催しました。アフガニスタンに関わる援助機関・研究機関関係者に多く参加していただきました。

- 第1回（10月8日）
「アフガニスタンの歴史・文化と教育」
前田 耕作（和光大学名誉教授・アフガニスタン文化研究所所長）
- 第2回（11月19日）
「アフガニスタン：対周辺国関係と復興支援を取り巻く環境」
鈴木 均（JETRO アジア経済研究所 新領域研究センター
国際関係・紛争研究グループ グループ長代理）



前田耕作先生（アフガニスタン文化研究所）



鈴木均先生（アジア経済研究所）

子どもと開発研究会（第6回～第11回）



澤村信英先生（大阪大学）

国際開発における子どもの問題を、教育の分野だけではなく、広い視野で検討するため、「子どもと開発研究会」を昨年から開催しています。煎り立てのコーヒーを飲みながら、研究者、実践者、学生が活発に議論をする場となっています。

■ 第6回（7月2日）

「JICA の子どもへの支援—教育協力と保健協力—」

国際協力機構（JICA）人間開発部長 萱島 信子

■ 第7回（7月30日）

「ケニアで小学校を作る—ムインギ県での活動—」

CanDo（アフリカ地域開発市民の会）

ナイロビ事務所調整員 景平 義文

■ 第8回（10月1日）

「ラオスにおける教育制度改革の動向と今後の課題

—初等教育の普遍化をめざして—」

神戸大学准教授 乾 美紀

■ 第9回（10月15日）

「若者による公教育—伝統的徒弟制度間の渡りと
技能形成—ガーナ国クマシ県の事例」

名古屋大学准教授 山田 肖子

■ 第10回（11月15日）

「ケニアの教育と子ども」

大阪大学教授 澤村 信英

■ 第11回（2月23日）

「アジア開発銀行の教育支援—東南アジアにおける高等教育
支援と地域間連携・協力への展望」

アジア開発銀行独立評価部主席評価専門官 廣里 恭史



研究会の様子（第四会議室）

JICA青年研修（アフガニスタン・女子教育）の実施

お茶の水女子大学は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、五女子大学コンソーシアム（加盟大学：お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学）の枠組みで、グローバル協力センターが中心となり、2011年1月14日（金）～1月26日（水）にアフガニスタンから19名の女性教員の研修を実施しました。五女子大学コンソーシアムによる研修生受け入れは8年目となり、約120名の研修生を送り出してきました。

アフガニスタンにおいては、歴史的、社会的、文化的、経済的理由から女子の初等教育の就学率は男性と比べて非常に低い状況です。女子の教育事情を改善するためには、女子教育や女性教員に配慮し、男性も女性もが学びあえる魅力のある学校を作り出すことが必要とされています。

そこで本研修事業では、アフガニスタンの女性教員の質の向上と魅力ある学校づくりを促進するため、女子教育の重要性和教授法を学び、日本の戦後復興や男女共同参画についての理解を深め、アフガニスタンの復興のビジョンの構築を支援する研修内容となっています。今年は特に、日本の教育現場における「教材研究」「教授法」に関する授業視察を数多く取り入れたり、アフガニスタン復興支援シンポジウム等、同じ世代が「平和」や「復興支援」について考え、意見を述べあうための青年や学生との交流の場づくりを重視しました。研修生の終了時のアンケートでは、日本の文化や教育現場に刺激を受け、満足度が高い研修と評価されました。最終日に、研修員からは、「学んだことをもとに、日本で得た経験を他の教育従事者に伝え、教員全員で教育改善に貢献できるようにしたい」とのメッセージが伝えられました。研修員各々が、研修を通じ、問題意識を具体化し、アクションプランを構築する機会となったようです。

（グローバル協力センター講師 桑名恵）



日本の教育の講義



国際シンポジウムでの挨拶（内海先生）

国際学生フォーラムについて

特別経費「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」活動の一環として、2011年2月14日から15日の2日間に亘り、アメリカ合衆国ヴァッサー大学において、国際学生フォーラムが行われました。ヴァッサー大学からは教授から推薦を受けた学部生10名（内1名辞退）、および、お茶の水女子大学からは公募により選考された文教育学部、理学部、生活科学部の3学部からの学生10名が参加しました。ヴァッサー大学は本学との長年の協定校で、両大学間では、交換留学生派遣制度や、本学グローバル教育センターによるヴァッサー大学のサマープログラムの受入れを通じ、毎年学生の交流が活発に行われてきました。本年度はヴァッサー大学創立150周年にあたり、ヴァッサー大学にとって、本フォーラムは記念事業の一環としても位置付けられました。

国際学生フォーラムは、2部構成で行われました。第1部では、ヴァッサー大学からQui教授の「従軍慰安婦問題」、お茶の水女子大学からは内海教授による「マサイ族への教育調査」の講義が行われました。その後、それぞれの学生が「平和構築活動」をテーマとした研究成果および活発な取り組みや関心分野についての発表を行いました。フォーラムでの発表に向けては、発表レポートを作成し、ヴァッサー大学とTV会議システムにて、事前打合せを経ての現地入りでしたが、現地入りしても尚、参加学生間では発表原稿の読みあわせや、活発な意見交換が連日連夜繰り広げられていました。専攻、学年が異なる学生が「平和構築」に関して意見交換をし、問題意識を共有することで、広範囲で抽象的なテーマを個人の中に落とし込み、具体的に実感することが出来ていたように思われます。第2部では、発表を受けての講評および自由討議を行い、活発な意見交換が行われました。

学生フォーラム最終プログラムでは、入江昭ハーバード大学名誉教授による「The Making of a Trans-Pacific Partnership」をテーマにした特別講義が行われました。TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）締結等が事例に上げられ、従来の国家間の国際連携の動きに加え、非政府アクターによる交流の影響力が加わる傾向が強いというグローバル社会の特徴が説明され、パートナーシップの構築や平和な未来の創造においては、歴史を学ぶことが不可欠であるという事が講義されました。平和構築における相互理解の重要性や、非政府アクターによる交流の影響力についての講義は、学生達の今後の関心分野を広げるにあたっての応援メッセージとなりました。

参加した学生にとっては、互いの地域・国際貢献活動への意識の国境を越えた普遍性を確認し、それぞれの活動に刺激を受ける場となったようです。また、世界の女性と子どもへの支援を行うための意識が高まったという効果が双方の学生から聞かれました。率直な意見交換を通じて、更なる強い信頼関係に基づいたネットワークの構築を行う貴重な機会となりました。

（グローバル協力センター AA 駒田千晶）



学生の発表の後の記念撮影

ミルズカレッジ研修について

2011 年 2 月 28 日～3 月 7 日までの 1 週間、お茶の水女子大学 2 名、奈良女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、同志社女子大学の各 1 名の計 6 名がお茶の水女子大学の内海成治先生と甲南女子大学の高橋の引率のもと、ミルズカレッジでの研修を受けました。

本研修は、2010 年 12 月にお茶の水女子大学で行われた国際ワークショップに招聘したミルズカレッジの Dr. Margo Okazawa Rey と参加学生の Amy Duong が中心となって企画してくださったものでした。

ミルズカレッジでは、広大なキャンパスの中で熱心に授業を受け、勉強する学生の姿勢に刺激を受けると共に、本事業のテーマである「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」にもとづき、ミルズカレッジの学生や教員と日米の安全保障の問題や平和構築に関する政策立案に関して意見交換を行いました。また、ミルズカレッジのご配慮により、平和構築やエスニックグループに関する講義を聴講する機会も得ることができました。

参加学生は、全て英語での議論や聴講に戸惑いながらも、グローバル社会で抱える貧困や紛争の問題、多民族多文化社会の課題について考えさせられたようです。特に積極的に活動を行うミルズカレッジの学生に触発された部分は大きかったようです。Dr. Margo の講義で取り上げられた沖縄の基地問題や平和に関して、「自分は何をすべきか」について各々が改めて問題意識を整理する必要性を感じたようでした。

本研修は、大学、専攻も異なり、出身地も異なる学生たちが「グローバル社会の平和構築」について考えるために集まり、研修に参加しました。ミルズカレッジの学生と共に世界の「女子大学で学ぶ学生」が国際社会に向けて、何をすべきかを互いに考える機会を得たことは、「平和構築」のネットワークを日本国内に、世界に広げることにつながりました。

本研修の最後に、参加学生と話し合い、スタディグループを結成し、次年度は本研修参加者を核に新たなメンバーを増やし、世界の女性による「平和構築」ネットワークを創成していくことを約束しました。学生が今回の研修で感じた事、そしてアメリカで得た仲間を糧にして、活動や勉強に役立たせてもらいたいと思います。

ミルズカレッジ研修を実施するにあたりまして、大変お世話になりましたミルズカレッジの Dr. Margo Okazawa Rey、Amy Duong に心より御礼申し上げます。

(お茶の水女子大学グローバル協力センター客員研究員・
甲南女子大学文学部講師 高橋真央)



ミルズカレッジの公開講義に参加

センター行事 (2010年6月下旬～)

6月 24日	公開講義第1講 (講師：内海 成治)
7月 2日	第6回子どもと開発研究会 (講師：萱島 信子)
7月 14日～ 26日	東ティモール調査
7月 29日	公開講義第2講 (講師：阿部 健一)
7月 30日	第7回子どもと開発研究会 (講師：景平 義文)
8月 15日～ 25日	ウガンダ調査
10月 1日	第8回子どもと開発研究会 (講師：乾 美紀)
10月 8日	第1回アフガニスタン学術フォーラム (講師：前田 耕作)
10月 9日～ 10日	「共に生きる」勉強会 (於日本女子大学)
10月 15日	第9回子どもと開発研究会 (講師：山田 肖子)
10月 28日	公開講義第3講 (講師：村井 吉敬)
11月 4日～ 7日	INEE 国際会議 (於パリ・ユネスコ本部)
11月 14日	「共に生きる」関西学生勉強会
11月 15日	第10回子どもと開発研究会 (講師：澤村 信英)
11月 19日	第2回アフガニスタン学術フォーラム (講師：鈴木 均)
11月 25日	公開講義第4講 (講師：桑名 恵)
11月 26日	「共に生きる」関東学生勉強会
12月 6日～ 9日	国際ワークショップ「共に生きる」
1月 14日～ 26日	JICA 青年研修 (アフガニスタン・女子教育)
2月 10日～ 13日	米国 (ニューヨーク) 調査 (INEE)
2月 10日～ 17日	国際学生フォーラム (於ヴァッサー大学)
2月 21日	名誉博士称号授与記念講演会「共に生きる—ミリアム・ウェレ博士に聞く」
2月 23日	第11回子どもと開発研究会 (講師：廣里 恭史)
2月 28日～ 3月7日	ミルズカレッジ研修

編集後記

本号では、2010年下半期のグローバル協力センターの活動をまとめてみました。改めて、グローバル協力センターとして数多くの活動を実施できたことに感慨を覚えます。イベントの開催やニュースレター作成など、様々なご協力いただいた皆様にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。(桑名 恵)

発行

編集

TEL & FAX

E-mail

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

桑名 恵、上中佐江子、駒田千晶、佐川朋子

03-5978-5546

info-cwed@cc.ocha.ac.jp